

2016年度 帰国隊員/青年支援プロジェクト 実施報告書		提出日 2017年 9月 5日
氏名：	新 江梨佳	実施国： マラウイ共和国
		協力活動 調査研究
活動名称	マラウイ共和国の「学習者中心」型授業の現場実践における課題と可能性	
実施期間	2016年12月～2017年6月（継続中）	
(1) 申請した動機		
<p>青年海外協力隊員として活動したマラウイ共和国の中等教育の教育実践に関し、大学院修士課程の研究という異なるアプローチで、再度携わる機会を得た。本研究では、近年のマラウイ共和国の教育分野が重点的に取り組んでいる項目のひとつである「学習者中心 (Learner-Centred)」型教育をテーマとし、現場教師の認識やそれに基づく実践を軸に、現状の詳細と展望を現地文脈に即して描くことを目的としている。</p> <p>以前青年海外協力隊員として現場に密着した経験を生かして、現地の状況に即した理解をより深めることに加え、学習者中心の教育に関して、マラウイの文脈での授業実践事例など、今後に向けた具体的な指針につながる知見を得ることとする。また、それらの知見を学術論文という形で公にすることで、マラウイ国内外から同国の教育に関わる多様な活動への参考資料として寄与し得る研究となることを目指している。</p> <p>上記の内容や展望が、本支援プロジェクト主旨と近いものがあると考えられ、また、現地に密着した中長期の調査とそのための資金が必要であったため、申請をさせていただいた。</p>		
(2) 活動内容概要		
2016年12月、2017年2月、4月～7月に現地に滞在し、下記項目の予備調査および本調査を行った。		
<p>1) マラウイ中等学校教師の学習者中心型教育の認識に関するインタビュー</p> <p>規模等の異なる4つの中等学校から、教員資格の有無や担当教科等の異なる約20名の現職教師を対象とし、授業実践や学習者中心型教育に関する半構造化インタビューを行った。授業実践全般に関する考えから、特に学習者中心型教育に関する認識や実践の状況、それらを規定している経緯や環境に関することを調査した。</p> <p>2) 授業観察および授業準備・省察段階での教師とのディスカッション</p> <p>20名の教師の合計52授業に同席し、実際のどのような授業実践がなされているのかを観察した。一部授業については授業の準備時や授業後に教師とのディスカッションを行い、教師自身がどのような意図で授業を組み立てているのか、実践した授業をどのように捉えているのか等を調査した。また、マラウイ教育省とJICAのプロジェクトとの中で行われていた授業研究の活動に同席し、マラウイの教師教育者と教師の間でのディスカッションの様子も観察した。</p> <p>3) 学習者中心型教育をめぐる、教育政策文書や教員養成課程の変遷経緯や内容の分析</p> <p>教育政策やカリキュラム等の教育関連文書の収集と分析を行い、マラウイにおける学習者中心型教育が、どのような経緯や方法で導入および促進されてきているかを調査した。また、カリキュラム作成や教師教育に携わる教育省や教育政策関係機関、教員養成大学等の教育関係者とのインタビューを行い、多様な立場からの学習者中心型教育に関する考えや、実際に授業実践を行う教師が指針とする諸資料が、どのような意図で作成されているかを調査した。</p> <p>1および2、3の比較を行いつつ、教育実践の方向付けに関わる様々な立場の人たちの間に存在する認識や理解の微細なずれをつかむことを試みた。</p>		
(3) 活動の成果・苦労した点・反省点等		
<p>1. 得られた知見の概要（2017年8月現在 分析継続中）</p> <p>1) マラウイの中等学校教師の「学習者中心」に対する認識</p> <p>教員養成課程や現職教員研修等を経て、現職中等学校教師のほとんどが、学習者中心が重要視されていることを意識している。</p> <p>マラウイの教師による「学習者中心」の一般的な認識は、「何らかの目に見える行動として学習者が活動に参加している状態」を指し、特に生徒をグループにした学習者同士の議論や、問題を解くなどのタスクに生徒が取り組んでいる状況を代表例あるいはそのものと同義とする。また、多くの場合、「学習者中心」の対極として「教師中心」が置かれ、それは「教師が説明をして生徒が聞く状態」を指す。</p>		

このように、見た目上の生徒の活動形態に主眼がおかれた状況がマラウイの「学習者中心」の特徴と言える。マラウイの過去のカリキュラム改定では、従来の試験志向や暗記中心の学習が課題とされ、そこから脱却を図る方向性として学習者中心が掲げられてきている面がある。このような意図が教師自身の認識として語られることもあるが、一方で、「(学習者中心型授業により)生徒自身が経験することによって、学習したことを長く記憶していることができる」といった、学習の本質としては従来型と同じ志向が引き続き存在する状況も伺える。

活動形態を重視する学習者中心の考え方や、覚えることの意味合いが強い学習の捉え方は、教師個人の認識レベルのみでなく、現状のマラウイ教育全体として広くもたれているものといえるが、一部の教師や教師教育者、カリキュラム編成者などの中には、グループワーク等の活動形態のみではなく、その活動課題の質や活動中の生徒の思考に関して言及する人もいる。学習者中心を形骸化させず、本来意図している形で実践していくためには、このようなマラウイの教育関係者間の認識の細かい差異を丁寧に紐解いて教師の認識や授業実践につなげていく必要があると考えられる。

2) 学習者中心型授業の実践状況とそれを取り巻く環境

様々な制約や困難もある中で、各教師は国の方針を受けて、学習者中心型を目指した授業に取り組もうとしている。1)のような認識から、グループワークやペアワークを取り入れた授業が実践されるケースが代表的である。現状の学習者中心型教育の実践において、授業観察や教師とのインタビュー等からいくつかの検討点が挙げられそうだが(現在分析継続中)、主なものを以下に示す。

i. 現状から想定される課題① シラバスや教科書の活用に関する難しさ

教師が学習者中心型授業を試みる中で感じる課題や、あるいは試みることができない要因となる課題として、担当教科や学校規模に関わらず共通して挙げられるものに「シラバスの内容の多さ」あるいは「授業時間の不足」がある。1990年ごろまで主流であった試験志向の学校教育の影響もあり、マラウイの教員は、シラバスやシラバス準拠の教科書を網羅することを強く意識して授業を行ってきた。

現在使用されているシラバスや教科書は、教師の実践を支えることが意図され、アクティビティを取り入れることを促すようなシラバス構成や、アクティビティの事例が多数盛り込まれていた教科書になっている。しかしそれらを網羅することが目的化する傾向がみられ、しばしば単元の本質的なポイントから外れた部分へ教師や生徒が時間やエネルギーを注ぎ込む方向に作用したり、生徒の状態や教師の授業の方向性とアクティビティの内容が不調和になったりするケースが見受けられる。つまり、シラバス、教科書、教師のそれらの活用が、互いに支援的・補完的でない状態にあることが現在の(全てではないが少ないケースではない)状況の説明として考えられる。この後、ワークブックのようなアクティビティを軸とした補助教材の導入も検討されているが、教材を充実させることが必ずしも教師の支援になり得ない可能性があることは検討すべき課題といえるだろう。

ii. 現状から想定される課題② 教授に関する知識と教科知識とのバランス

1)および2)-iにも関連するが、学習者中心型教育に向けての教員養成の中では、教授法に関する知識および技能が重視され、指導教科に関する教科知識に関する支援が十分でない状況が見受けられる。マラウイの中等学校教員養成では、教員数の不足を補う意図も含め、1人が2科目(例:数学・物理)を専攻して資格を取得している。さらに、実際の学校での担当科目としては、専攻していた2科目のほか、さらに他の科目を担当する状況(例:数学・物理・農業)も存在する。これにより、指導している教科の十分な知識・理解を得る機会を持つことができない困難がある。

こういった状況の中で、学習者中心型教育を目指した授業に取り組む教師たちは、教科書に沿って教師が一方向的に教えこむ授業を行う場合には生じなかった課題と直面している。例えば、iiで挙げたように、多様な教材から学習のめあてに適したアクティビティを選択したり、生徒に合わせたアクティビティの課題を設定したりする際の指針が持たず、多くの項目を並列に扱うことにより授業時間が不足する状況が見られる。また、生徒に考えさせる授業を目指すゆえに、問いの設定や生徒の意見の活用方法によっては教科書での記載や教師自身の知識が十分でないところに踏み込まざるを得ない状況になり、結果として誤った知識を伝えてしまう状況もみられる。教授法に関する知識や技能が注目されがちだが、教授法を効果的に用いるための教科知識にもあらためて目を向ける必要があると考えられる。なお、初等教育の教員養成課程に関しては、現在改訂中の新規カリキュラムにおいて、教科知識強化を重点項目の一つとする方向で進められている。

上記のような現状の課題は、学習者中心型教育の実現に向けた過渡期に生じる課題ともいえる。変化の際に生じるひずみや溝を、それが生じる理由とともに詳細に分析していく。

2. 苦勞した点・反省点等

1) 研究の方向性の再検討

当初は、現地教員と共同での授業実践によるアクションリサーチを軸とする研究を検討していたが、現地調査を行う中で、早々からの介入を行う前に、まずは現場教師を取り巻く環境や教師や教育関係者の認識や考えを深く理解することが重要であると判断した。現地の様々な教育関係者との深いインタビューを軸として、現地のありのままの姿を丁寧に把握することを修士課程での研究目的とした。

スケジュール上、先行研究や文書資料の検討と、現地でのインタビュー調査とがほぼ同時進行となってしまうが、前者を先立って進めておければ、貴重な機会であるインタビューの際にそれぞれの対象者に焦点をより絞った問いに基づく深いインタビューができたように思う。

なお、(4)に詳細を示すように、博士課程への進学を検討しており、博士課程での研究において、今回の研究の知見に基づいた、より現場実践に近づいた研究を深めていくことを考えている。

2) 過去文書の入手及び検討

文書の保管状況等の課題から、教育政策文書や旧カリキュラム等の過去資料をまとまった形で入手することの難しさがあった。一方で、ひとつずつ尋ねるために、教育関係機関の多様な地位の職員の方と直接対面して相談・議論をする機会を持つことができ、話の中で得られる情報も多くあったように思う。

(4) 今後のプラン

現地調査で収集したデータをもとに分析及び修士論文の執筆をすすめ、2018年1月上旬に東京大学へ提出し、2月上旬の審査会を受ける。論文内容としては、上記の知見の概要をベースに教師教育等の先行研究と比較しつつ理論枠組みを具体的に検討し、授業のビデオ分析、インタビュー内容の分析、教育関連文書の横断的な分析を組み合わせ深めていく。

最終版の修士論文は、本プロジェクトへもあらためて共有させていただく。また、研究成果は英文に訳し、協力先であるマラウイの教育機関へも提出することを考えている。

また、現在の研究室で博士課程に進学し、本研究の発展となる研究を行うことを検討している。